木野通信

Kyoto Seika University was founded in 1968. It started out with high ideals that broke the mold of old Japanese universities. Kyoto Seika University is the place where teachers, studentsand all others are respected as human beings, and where the spirit of freedom and autonomy prevail. Although it is a small university, it is known for producing graduates who are unique and independent. From now on, in order to improve and develop this university, we will continue to believe in these ideals. Kyoto Seika University consists of two faculties: Humanities and Art. The Faculty of Humanities uses educational philosophy of experiencial, intercultul, and interdisciplinary approach to study broadly various peoples and cultures. The main purpose is to gain a deep understanding of living people's socieliesand cultures as a whole. The faculty of Art not only teaches skills and teachniques but also cultivatesinsight into Humanity. While considering the basic question of what is Art to Humans, we search fortrue art expression. Kino Press is a newsletter published by Kyoto Seika University and distributed to students, factlty, administrators, graduates and other members of the university community. This publication is intended to keep readers informed of all aspects of K.S.U.'s development, including on campus event, personnel changes and student news.

KINO PRESS
KYOTO SEIKA UNIVERSITY
NO.26

木野通信 第26号 1996年11月1日発行
京都精華大学庶務課
〒606 京都市左京区岩倉木野町137
TEL075-702-5200

若者の情熱こそ大学の条件

学長
斎藤博 SAITO Hiroshi

高校を卒業した若者の半数近くが大学に入学する。もちろん、大学が若者たちの集まる場であることは、これからも変わりそうにない。若者だけでなく、多くの社会人がここに加わり、大学が世代の交流の場になることも、われわれの理想である。大学を取りまく、より大きな社会の変化にともなって、この理想も少しずつであれ、実現できるようになるだろう。しかしいずれにしても、大学は若者が大切なのだ。あまりにも当たり前のことだが、これは力説したい。

若者人口の存在に大学が安住すればよいということではない。それだけのことならば、ただ数字の問題でしかない。忘れてはならないのは、学問、芸術には、若者の本質というべきものがなくてはならない、ということだ。

ジャクリーヌ・デュプレはイギリス生まれのチェリストだったが、複合硬化症という難病から、二十八歳という若さで演奏を断念せざるを得なくなった。そして、四十代半ばで、彼女はこの世から去ってしまう。悲劇的天才と人は言うかも知れない。しかし彼女が十代でデビューした当時、世間の大方の評判はあまりよくなかった。ジャクリーヌは感情にまかせて激しく弾きすぎると言うのだ。しかし、共演をした年輩の指揮者は、彼女を評して、こういった。彼女の演奏はあれでいいのだ。若いときは、やりすぎるぐらいの方がいい、と。

ここまでは、ジャクリーヌへの寛大な弁護にすぎないようにも聞こえるかもしれない。経験をつんだこの人物の次の言葉は、さらにユーモラスであるとともに、世代と世代の正味の共感を思わせて、われわれ大学で生きる者には胸を突くところがある。彼は、そうでなければ、われわれが歳をとる意味がない、と言ったのだ。このエピソードは若者の情熱を賛えているばかりではない。私が思い浮かべる世界には、若者との格闘をいとわない大人の存在がある。もちろん、知の世界、美の世界という場があってのことだが、情熱的にやりすぎるぐらいの若さに背を向けては、大学の意味を失ってしまうだろう。しかし、惰性に流されず、日々若さと向かい合うことは、一人ひとりの教職員にとっても、実はたやすい課題ではない。たしかに、世間的標準からすれば、京都精華大学には活気があると、外部の人達からいわれることは少なくない。これは、幸運な伝統によるものだと思う。この伝統が後退せずに、さらに、やりすぎるぐらいの若い人たちがあふれるキャンパスになるよう、祈念しないわけにはいかない。若い人たちがただ従順であるだけならば、われわれ少し年輩の教職員は自分が一体何者なのかわからなくなってしまうからである。

扉96・1 "SENSATION"
92C011 木村年克

図書情報館の未来像明らかに

Future

新しい建物の完成で図書情報館が新しい内容に生まれ変わる。その概要が固まってきた。

新しく建設される図書情報館の工事が着々と進んでいることは、これまでもお伝えしてきた。建物そのものは来年4月に完成、図書の移動などの開館準備作業を終え、9月にオープンする予定である。今回は固まりつつある、その概要をお知らせしよう。

新図書情報館の発足は、単に施設が新しくなるだけではなく、多様な機能が付加された「総合情報センター」の誕生を意味している。

新図書情報館はパソコン教室やＬＬ教室などの情報処理関係の教室を備えた講義棟との複合建築であり、「ライブラリー」「ＡＶセンター」「ミュージアム」の機能を有機的に総合した建築でもある。

また個々の機能においても規模が拡張されている。

新図書情報館棟は地下1階、地上3階からなり、基本的に地階は書庫、1階はＡＶセンター、2階はメインフロアーとしてカウンターなどを設置し、3階を閲覧室にする。

約70メートルの長さがある3階閲覧室は、約10万冊の開架図書を利用でき、約350名の閲覧が可能である。

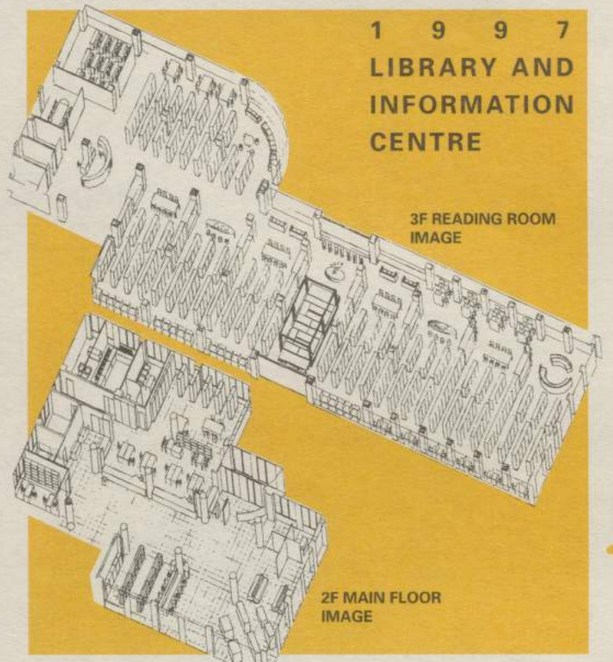
また1階ＡＶセンターは100席のブースとＡＶホール・編集室が利用でき、大学図書館では最大規模になる予定。

地階書庫は電動書架と博物資料を保管する収蔵庫などで構成されているが、個室キャレルや製本作業室も利用できる。資料収容力も、全体で、図書40万冊、雑誌1500誌、新聞35紙、ＡＶ5万点と、飛躍的に伸びる。

自動貸出システムや、荷物の持ち込みが可能になる入退館管理システムなどの機械化も進む。

あらゆる図書情報館の資料はすべて一元的に検索可能となるばかりでなく、さらに、通信ネットワークによって利用範囲は拡大される。

この新しい施設によって、学生たちの表現と創作が、あらゆるメディアと技法によって展開し、世界に発信していくことが期待される。



江戸時代の幻の染織資料、寄贈を受ける

極型小紋の染色作家として知られる『藤布（ふじぬの）』及び染織関係図書を、安達妙子・坂本公子氏のご厚意により、7月18日本学にご寄贈いただきました。

江戸小紋の型紙コレクションは、鈴鹿市伊勢白子の人間国宝・彫師六谷梅軒と六谷博臣が主に制作したものです。江戸小紋とは、江戸時代に裃や羽織・きものに用いた本来の小紋のことで、現在、その捺染用具である型紙は、伊勢型紙技術保存会によって伝統の技法が継承されています。

一方、藤布は藤蔓（ふじづる）に皮を裂いた糸を用いて手機（てばた）で織った古代織物で1300年の歴史をもっています。明治時代までは全国各地で織られていましたが、現在では宮津市下世屋などに2人の織手が確認されているだけで、近年とみに幻の原始布として注目されています。

本学では、来年9月に予定している展示施設の完成とともに、広く一般公開する予定です。

（図書情報館　藤岡昭治）

美術学部選抜展、東京で開催。

Art

5月の定例教授会において東京麻布工芸館で学生達の選抜展を開催することが決まりました。

責任者を仰せつかったものの、準備期間が2か月余りしかなく、果たして成功するかどうか、不安でした。早速、小林学部長と相談して委員の人選に入りました。森本（洋画）、川崎（陶芸）、伊奈（ＶＣＤ）、新井（建築）の各先生は、学部長からの依頼を快く引き受けて下さいました。

各委員の先生の役割を決め、討議に入ると、決めなければいけない問題がいっぱいでてきたが、オープニングまで時間がないので、行動しながら考えようと委員会で意志一致しました。

理事会からは松谷先生、そして入試広報課も参加することとなりました。これは展覧会初日の広報活動のため。

夏休み中にもかかわらず、委員の先生はじめ各分野の先生方も積極的に協力していただけたことは、今回の展覧会の大きな成功の基となりました。

学生たちも搬入時間に遅れることなく、陳列も各分野協力しあって予定通りに終わることができました。

工芸館の外の垂れ幕と展覧会場入口の大きな看板、また7000枚各方面に郵送したハガキをは、それなりに効果があったようです。

会期中は一般の方をはじめ、高校・研究所の先生、高校生、そして同窓会の人達が見にこられました。

六本木という場所の問題もあり、入場者は大入りとは言えませんが、このような企画を続ける事により、関東方面にも京都精華大学の名前が浸透していくことでしょう。

関係者のみなさん本当にご苦労さまでした。紙面をお借りして御礼申し上げます。

（TD分野教員　高谷光雄）

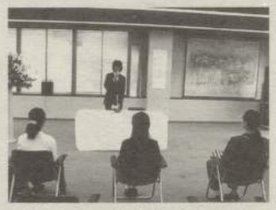
1996年度 秋期入学式・卒業式

後期授業開始を目前にした9月13日、1996年度秋期入学式と卒業式が本館3階会議室で行われた。

午前10時からの入学式で新入生として迎えたのは、韓国と中国からの3名の留学生。斉藤学長の式辞につづいて、藤枝人文学部長・岡本学生自治会長から祝辞が述べられた。

引き続き、卒業式が挙行され、今回は5名の卒業生を送り出した。学長からひとりひとりへ卒業証書が手渡された。

少人数ではあったが、ひとりひとりに入学・卒業にあたっての感想を語ってもらったり、小規模ならではのあたたかい雰囲気が感じられた。



お昼からは、新入生・卒業生両者を交えての歓送迎パーティーが開かれた。教職員はもちろん、新入生のご家族、先輩の留学生、学生自治会のみんな…といろんなひとが参加し、期待や思い出が語られた。

国際交流協定、新たに2校と締結

International

拡大する協定校は、大学が提示する世界へのステップ。

「国際主義」を教育理念の重要な柱にすえる人文学部では、学部開設以来、国際交流に力を注いできた。美術学部においても、多様化をきわめる社会や文化の動向の中に自分の表現をおいてみることが、ますます重要になってきた。このような観点から、外国で学ぶ機会を提供するために海外の大学と協定を結んできた。アメリカ、オーストラリア、タイの大学と協定を結んでいる。今回また新たに、南カリフォルニア建築大学（米国）とシーナカリンウィロト大学（タイ）との間に協定を結んだ。

これを機会に、学生たちには活躍の舞台をますます国際的な場に拡大させてもらいたい。

世界レベルでデザインを追求 南カルフォルニア建築大学

建築専攻を持つ大学としてははじめて、南カルフォルニア建築大学(SCI-ARC)との交換授業協定が交された。この学校は世界にもあまりない建築専門の大学。SCI-ARCは約1/3が大学院であり、より深い教育がなされているし、その思い切った教育方針は多くのメディアを通して世界的に広まっている。私もこの学校の卒業生である。

海外交換授業では、世界という場を通して、デザイン言語のあり方を追求する教育機関が、いかにお互い刺激を与え合っていくかということが、いま大切である。欧米では海外で学習するトラベリング・スタジオという形式をしばしば用いられている。この交流でより一層、国際的大学として呼ばれることを期待している。

（建築分野教員 新井 清一）

バンコクで語学と文化を学ぶ シーナカリンウィロト大学

既に実施6年目にあたる「海外フィールドワーク」のなかでも、とりわけ人気の高いタイにおいて、ショートフィールドワークをバンコクにあるシーナカリンウイロト大学で実施することとなった。語学を中心とする3週間のプログラムを提供してもらうというものだ。

今夏実施された第1回目では、よく練られたカリキュラムと熱心な指導はもとより、生活面でも厚いお世話をいただいた。

大学が学生に提示できるものについて、さまざまな試行錯誤が繰り返される中で、「フィールドワーク」は確かに魅力的な回答の一つであるように感じる。ますます多くの充実したプログラムを創造しよう！！

（国際交流課 鹿野健一）

コンペに続々入賞。活躍する建築学生

●石井美香（4年生）
「都市の壺」
第7回タキロン国際デザインコンペテイション佳作
「カンディンスキーの家」
第5回S×L住宅設計コンペ出江寛賞
●進藤強（4年生）
新しいオフィス空間 最優秀賞
●高橋かほる（3年生）
「異邦人の家」
第5回建築学生設計大賞 奨励賞

建築分野は毎年、全国的・世界的な設計競技に数人の学生入賞者を輩出している。

ある建築ジャーナリストの話では、日本の建築系大学の中で本学は、在籍学生数あたりの入選者の割合が日本で最も高い大学だという。

全国的に建築の教育が多様化し、様々な試みが行われている中で化している中で、今後ともこのレベルを保持し、世界に通用する揺るぎないポジションを獲得することが期待される。

台湾国立政治大学「振聲合唱団」歌声響く。

Glee

夏も盛りの7月4日、本学の明窓館において台湾国立政治大学「振聲合唱団」がすばらしい歌声を聞かせてくれた。1985年に結成されたこの混成合唱団は、台湾の大学合唱コンクールで連続13回優勝した実績をもつ。学内外から大勢の人たちが訪れ、約150名がこの公演に集まった。

台湾は日本と正式な国交がないため、日本での公演はなかなか困難なことであった。この度精華大学の他いくつかの大学がこの合唱団を招聘できたのは非常に喜ばしいことである。

台湾国立政治大学は国立台湾大学につぐ名門校で、今回45名の団員が日本公演に参加した。本学でのプログラムはキリスト教の宗教音楽にはじまり、黒人霊歌、世界の民謡、「黄山、奇美的山」（晏明作詞、屈文中作曲）とつづいた。日本の民謡「ほたる来い」も歌われ親しみを感じさせてくれた。本学には音響効果等設備の整ったホールがなく、受け入れ体制は不充分であったが、全員この合唱団の歌声には強く魅せられていた。

公演後、歓迎パーティが新食堂のある悠々館で開かれた。学長の挨拶に始まり、本学の台湾人留学生が紹介されたあと、本学吹奏楽団の歓迎演奏が雰囲気を盛り上げ、さらに副指揮者が飛び入りで指揮に加わるなど、政治大学と本学のなごやかな交流がもたれた。

今回、台湾からの合唱団を迎えることが出来た背景には、学長・事務局長のご理解のもと、国際交流課の全面的バックアップ、企画室の財政的援助、台湾人留学生および本学学生の多方面の協力があった。多くの人の支えのなかで、台湾政治大学合唱団を迎えることが出来たことはこの上ない大きな喜びと、国際交流における貴重な実績となるものである。

（人文学部教員 呉宏明）

SEIKA'S GOODS 誕生!!

この秋、京都精華大学にも大学名入り商品が誕生した。企画・制作したのは、中田昌宏（78Ｄ）、尹賢相（79Ｅ）、平井英孝（79Ｅ）、谷口周郎（79Ｔ）の卒業生のみなさん。活躍の分野は違うが母校を愛する気持ちは同じ。校章も校歌もない自由な校風は大変気に入ってるところだが、卒業生も在学生も、よりいっそう誇りと愛着をもてるように、と大学名入商品『SEIKA'S GOODS』を考えた。

自分で演出できるシンプルなデザインと日常的な実用性のあるアイテムをそろえることにこだわった。多くのひとに利用してもらえるよう、少ロットにも関わらず販売価格をおさえたのが、苦労した点だ。

みんなが『SEIKA'S GOODS』を身につけて、京都精華大学の名前がますます街中にあふれだせば面白い。

主な商品は以下の通り。

・Ｔシャツ（¥1800）
・ハイネックトレーナー（¥1800）
・マグカップ（¥600）
・ポット（¥2500）
・皿各種（¥700～1500）
・トートバッグ（¥1600～2200）

他にもいろいろある。

大学では購買部（画箋堂）で販売。

卒業生など学外の方の申込・問合は下記まで。

〒602京都市上京区堀川紫明下ル
634エレファント『SEIKA'S GOODS』
販売係（担当平井英孝）
TEL 075（451）7511
FAX 075（451）7512

今夏、SEIKAは西へ東へ。

SPECIAL ISSUE

ますます充実する体験学習プログラム

「フィールドワーク」といえば、今や人文学部の代名詞ともなった体験学習プログラム。後期半年間を学校の外で過ごすものだが、多様化する学生の要求に応え選択肢を増やすため、休暇中に行う「ショートプログラム」の充実につとめてきた。イギリス、タイの海外プログラムに加えて、国内プログラムも、国内留学協定を結ぶ北海道・旭川大学と沖縄・沖縄大学で異文化を体験した。「学外実習」の伝統を有する美術学部も、昨年から丹後地域のフィールドワーク・プログラムをスタートした。夏になっても休むことを知らず、西へ東へ、海外へと活動した京都精華大学。参加者のみんなにレポートしてもらった。

もう一度尋ねたいやさしさのタイ・プログラム

Thailand

プログラムに参加する前は、一か月ってとても長いと思っていた。一か月近くも本当にタイで生活できるのかと少し不安もあった。しかし終わってみると、あっという間に過ぎてしまったように思う。もっといたかった。

バンコクの空港からホテルまでの間、バスの窓からずっと初めて見るタイの町を眺めていた。かなりの都会なのに「緑（木など）」が多い。国旗やカラフルな建物も印象的だった。バスにタクシー、バイクタクシー、トゥクトゥクなどいろんな乗り物も見ることができた。特に、バイクタクシーは手軽で便利なので、日本でも営業してもらいたい。

タイに行ってみて、これはいいなあと思ったことがいくつかある。まずは、ヤクルトを一本ずつバラで買えること。そしてタイ式トイレ。大きな容器に水が汲み置きしてあり、その中に小さなおけが浮かんでいる。用を足した後、必要な分だけの水をおけで汲んで自分で流す。最初は少しとまどったけれど、帰る頃には慣れてしまった。

あちこちに屋台が存在するというのも、とても魅力的だった。私もよくタごはんを食べに行った。お店のひと達はみんな優しく、親切にしてくれた。果物の屋台では果物の名前を、夕食を食べに行った店では料理の名前を教えてもらったりした。お客さんは常連のような人が多く、とてもアットホームな感じでいい雰囲気だった。屋台は、ひとと気軽にしゃべれる場になっている。

学校で勉強したことが、すぐに実践できたのはとてもよかった。果物の名前を聞いたり、どのバスに乗ったらいいかを聞いたり、値段をねぎったり。聞いた人はみんな親切に教えてくれた。シーナカリンウィロート大学で友達になった学生達も、とても親切にしてくれた。これきりで終りにするのではなく、タイ語をもう少し勉強して、絶対またタイに訪れたい。

（人文学部2年生 次田史季）

英国の懐の深さを感じるイギリス・プログラム

England

96年8月23日の夜、プログラム参加者は元気に関西空港に降り立った。イーストロンドン大学での35日間の語学研修を終えてきたのである。日本を出発するときの不安と緊張に代わって、英国の人と心に触れた喜びが皆の顔にあふれている。

7月21日の早朝。ヒースロー空港から眠っているロンドンの市街を一周して、写真でしか見たことのないロンドン塔やタワーブリッジに歓声をあげ、ロンドンの東部にあるイーストロンドン大学の寮に落ち着くまで、長い一日であった（日英の時差は8時間）。

翌日の月曜日から4週間、学生たちは英語のレッスンを受けた。

イースト・ロンドン大学は、市内から地下鉄とバスを乗り継いで1時間ほどのバーキングにある。周囲は閑静な住宅街で、典型的なセミディタッチトハウス（2軒1棟の家）が並ぶ。前庭には色とりどりの花が咲き乱れる。近くには大きな公園があり、犬の散歩やジョギングなど憩いの場になっている。

大学自体はポリテクニックから発展したユニバーシティなので歴史も浅く（と言っても創立は110年前）、規模もわが大学と同じくらいであるが、学部学科数は相当ある。この大学のジョン・シンソン先生と人文学部長の藤枝澪子先生の親交があって、語学研修プログラムがはじめられたのが3年前である。毎年学生の反応を見ながらプログラムに改善・工夫がなされる。それだけの語学の授業のノウハウがあるからだろう。

生活面でも、習慣が違い、日本語が通じない世界にほうり込まれて、戸惑う学生たちを親切に支えていただいた。

熱意と思いやりあるイースト・ロンドン大学のサポートによって、2週間の寮生活と2週間のホームステイを経た学生たちは、驚くほどたくましくなった。お別れパーティーではひとりずつ体験発表したが拍手喝采を浴びた。

小さな失敗はいくつもあったが、学生たちはお互いに協力して、それを乗り越え、土台にして前進した。最後の6日間は、スコットランド・ウェールズ・湖水地方へと各自でかけても行った。これも貴重な体験になった。

かつて世界一の大英帝国を誇ったイギリスの懐の深さを存分に学生たちは感じ取ってきた。古い物を大切に保存し、質素な生活をしながらも文化を重んじる英国人の心も大いに学んできたはずである。

（人文学部教員 北脇徳子）

忘れていたものを思い出させる沖縄プログラム

Okinawa

いーっぱいおもしろいことがあった。喜納昌吉氏らとサバニ・ピース・コネクションに参加してたから、結構知ってるつもりやったのに、もっと楽しいことが見つかった10日間やった。

ここでは久高島行きについて書いてみよう。一番濃かった気がする。

悩みなどきれいに消してくれるほどの青すぎる海を越えれば、そこは神の島。

港についてから「さぁどうしよう」と考えはじめても何とかなるのが島である。早速、島内散策へ。荷物は置きっぱなしで。島には盗みをする奴はいてない。まーしーというやんちゃな女の子に出会う。奴に連れられて、漁師のひとたちの飲み会にお邪魔した。ごちそうになっているうち、まっくらになった。街灯があまりないのだ。そのおかげで星がとてもきれいや。舗装されてない道に寝転がり星を楽しんだ。プラネタリウムの存在が悲しくなった。そうでもしないと星を見れない都会が嫌になった。ここでは星をつまみに酒が飲めるのだ。

青過ぎる空の下の青過ぎる海で一日中泳ぎまくった。那覇に戻るとき見えなくなるまで手を振っていたまーしーはいつまでも俺らの人気者や。

たった1日のことしか書けなかったけど，ダチさんの言葉を借りれば、10日間は毎日事件やった。全てを通して思うこと――沖縄はただのリゾート地なんかやない。心のリゾート地なんや。

（人文学部1年生 井本修）

こころと自然が交感する北海道プログラム

Hokkaido

大阪の街の中で育った私にとって、突然放り出された北海道の自然は、あまりにも強大な魂のように感じられました。夜になれば闇があり、その闇を照らす月があり、いまにも降ってきそうな星がある。当たり前のことを受け止められず、初めて経験する空気の中で、私は何をするべきなのか分からず、ただ圧倒されていました。

翻弄されながらも、北海道の環境や歴史、そして日本とは異なったアイヌの文化に触れる体験を主とした講義を受けました。都市が便利さを追及するあまり、無味乾燥なものになりつつあるのではないか、と考えました。生や死、それに伴う恐怖が被い隠されている今は、結局表面的な快適さや豊かさのように思うのです。そして私自身、それを考えることを避け、現状に満足していました。しかし、アイヌのあばあさんの言われた、「山があって、そこに動物がいて…その中に人間もいるんだ」という言葉を聞くと、とても豊かに生きていると思うのです。この言葉に違和感なくうなずけるようになれば、私の心にも自然が語りかけてくれるでしょう。多くの人と出逢い、自然を満喫し、その土地の抱える問題に触れ心の幅が拡がりました。ここでの体験が更なる体験へと繋がることを嬉しく思います。

（人文学部3年生 岡田真知子）

地域づくりの新しい取組 丹後サマーセミナー

Tango

丹後サマーセミナーは“交流による地域の活性化だけでなく、知的インフラが加わり、若者が「定住・通住」し活気に満ちた地域づくりを”という京都府が推進する「オープンカレッジ構想」に本学が呼応した形で95年度により実施し、本年度で2回目。9月12～13日、丹後地域のフィールドワークを通じて主に地域文化と民俗、地域社会とデザイン（生活道具）を学んだ。地域の人達の話しを聴き、交流を深める機会がけ多く設けられていることに学生は満足した様である。

このサマーセミナーは計画当初より丹後町役場をはじめ地域の人達の惜しみないご協力を賜った。それは本学への期待の自然な現れであり、地域づくりにかける熱意に他ならないと思う。今回のサマーセミナーでは建築分野葉山ユニットが丹後宇川地区温泉地構想に積極的に参加する方向で、地域文化と町並みの研究・視察をプログラムの中で実施したが、研究に終わらず、地域づくりに関わっていく方法論を検討することは、「フィールドワーク」そのものが持つ今後の課題であろう。それが地域社会と大学の共存共栄への道を開くはずだ。

（教務課 細谷周平）

オーストラリアからの視点

中島勝住（人文学部教員）

昨年度、在外研究の機会を得て、一年間オーストラリアに滞在した。目的が多文化教育の実際を知るということもあって、家族ともども「移住」した。ここでは、英語をまったく知らない一人の日本人小学生が通った、あるメルボルンの小学校を紹介したい。下の子どもは日本の公立小学校で4年を終了して渡豪した。もちろん英語に関する知識はゼロ。お世話になったのは、人種的には比較的多様だが、皆が英語を話すごく「普通」の公立小学校であった。中産階級が多い「典型的」なメルボルン北東郊外で、緑が多く、常時鳥のさえずりが聞こえるというような地域の中にあった。

全校生徒139名ということもあってか、子どものクラスは5、6年の混成学級であった。オーストラリアの小学校は、教科カリキュラムではなく、プロジェクトと呼ばれるテーマ中心の総合カリキュラムを実施している。そのせいか、混成であっても授業進行に差し支えはないようで、子どもたちは、「あそび」を通して「学習」するということになっているようだ。

これに対して昨今、教育内容の「高度化」を望む声も多い。だが、基本的に「高度化」は親の責任と認識されているようである。また、こうした「楽しげ」な学校のありようは、親は学校を「絶対視」しないという前提があってのことであることも見逃せない。

まちがいなく、こうした学校を取り巻く「柔らかさ」と「穏やかさ」は大したものだと思った。しかし当初私たちにとって、英語をまったく知らずに、多くの時間を学校で過ごすということを想像しようもなかった。ところが、子どもは、とうとう最後の日まで学校ではひと言もことばを発しなかったという、驚嘆すべき頑固さを発揮しながら、見事に「楽しげ」な一年を過ごしてしまった。私たちおとなの想像力の貧困さを思い知らされた。

さて、この経験からは、人間のコミュニケーションにとって言葉の壁はないのだという、語学不得手者にとっては、なかなかに魅力的な結論を引き出せそうなのだが、そうではないだろう。私たちが一方的に想像する、ことばによるディスコミュニケーションという真っ暗闇にも似た「恐怖」など容易に一蹴してしまう「何か」が、この学校の時空間にあったということを意味している。一年間、ことばをひと言も発することのなかった子どもが、オーストラリア各地への旅行という魅惑的な計画の前でさえ、欠席することを最後の最後までいやがった学校とは？と、考えざるを得なかった。

O B 紹 介

大阪でモンゴル料理店を営む
スーチン・ドロンさん

はるか草原の国モンゴルに、料理を通じて出会える「モンゴルオルゴ」は、本学卒業生のお店。雄大さとやすらぎを感じる羊料理は体験の価値あり。

モンゴルといえば、広大な草原の国として日本にもあこがれるひとが多い。しかし、モンゴルの文化に直接触れる機会はこれまでなかなかなかった。

そんな、日本では珍しいモンゴル料理の店が、大阪にある。この春にオープンしたばかり。

店名は「モンゴルオルゴ」という。「オルゴ」は、普通サイズの天幕「ゲル」と違って、大家族が集まる大きな天幕のことだ。

マスターは京都精華大学卒業生のスーチン・ドロン（人文学部・95年卒業）さん。

ドロンさんは中国モンゴル自治区の出身。在学中からモンゴルの書道や刺繍を紹介するサークルをつくるなど、モンゴルの文化を紹介する活動を行っていた。お母さんが著名な書家ということもあり、94年には日本で初めてのモンゴル書道展開催にも取り組んだ。モンゴル文字を読める人は今はモンゴルでも多くない。

日本は、もちろんモンゴルにおいても貴重な機会だった。その時のモンゴル文字書作品をすべて本学に寄贈していただいたのも、ドロンさんが架け橋になってくれたからだった。

卒業論文は歴史のゼミに入って「大モンゴル」という題名で、モンゴルの歴史と文化について研究した。

モンゴル料理といってもちょっとイメージがわかないひとがほとんどだろう。ここでメニューを紹介しよう。

何といっても羊肉をよく使う。シンプルに味わうには骨付き肉をそのまま焼いたものがある。モンゴル産の岩塩をつけて食べる。薄い塩味でゆでたのも絶品。水餃子もいける。しゃぶしゃぶももちろん羊肉。羊肉以外では、卵とニラをモンゴル風パンで包んだ「サル」やモンゴル風野菜炒めもある。日本人の舌に合わせることをせず、本場の味そのままだと言うが、どれもくどさがなく食べやすい。

酒ももちろんモンゴル産。乳酒や白酒などよそではなかなか飲めない珍しい種類がズラリと並ぶ。とりわけ「馬乳酒」は貴重だ。日持ちしないため、モンゴルから取り寄せたときにうまく居合わせないと、飲むことができない。白く濁ったヨーグルト味だと言うが…。残念ながら取材に訪れた際も品切れだった。

「モンゴルオルゴ」は料理を通したモンゴル文化紹介の場でもある。関西に在住のモンゴル留学生が故郷の味をあじわいに来ることもあるようだ。店内には、ミュージックテープをはじめ、さまざまなモンゴル関連グッズが売られている。箸がセットになっている肉を切って食べるための大きなナイフなど、日本で手にいれることがむずかしい貴重な品も多い。

お店は日本人の奥さんとドロンさんのふたりで切り盛りしている。おふたりからモンゴルのはなしをあれこれと聞きながら料理を食べるのがとても楽しい。

場所は、ＪＲ片町線で京橋のひとつ隣、鴫野駅下車、東へ約1分。
<住所>大阪市城東区鴫野東2-23-11
<TEL>06-969-6248

クラブ紹介

ラクロス同好会

ファッションじゃない、本気だからカッコいいのだ。歴史は浅くても、精華大ラクロスは元気と明るさで他大学を圧倒する。

ラクロスが日本に入ってまだ10年余り。プロ制度もないので、まだまだ、一般的にはなじみのうすいスポーツかもしれない。しかし、街中でクロス（棒の先に網のついたラクロスの用具）を手に颯爽と歩く少女の姿は、だれもが印象深く見た記憶があるに違いない。

精華のラクロス同好会も、はじまりはそんなファッションへの憧れだった。「自分たちもラクロスをやってみよう」という話になり、まだ一回生だったふたりの女の子は軽い気持ちで試合を観に行った。しかし、サッカーと同じ位の広いコートを駆けめぐり、激しくボールを奪い合う戦いぶりにそれまでのイメージはふっ飛び、新鮮な衝撃を覚えた。

早速、ラクロス協会にもコンタクトをとり、学内でも勧誘を開始した。2回生の春には18人の仲間を集め、クラブは創設された。もちろん男子のラクロスもあるが、現在は女子のみ、部員数22名。まだ3年の歴史である。

現在まだ同好会のため、出雲路橋近くの鴨川グラウンドを借りて練習している。朝2時間半を週3回行っている。いささかハードでもあるが、みんな充実感を楽しんでもいる。コーチなど指導者も置いていないので、協会の合同練習に参加したり、他大学を参考にしたりして、練習メニューは自分たちで作りあげた。

ラクロス協会では今年から準加盟校になっている。正加盟となって、まず4部リーグに出場したいと考えている。一方、学内でも現在の「同好会」から「部」への昇格を目指している。ともに、活動実績そのものが評価の対象であるという意味では、同じである。このふたつのことを同時に実現していくことが現在の目標である。

実力では問題がない。ここのところは連戦連勝。元気と明るさが売りの精華大ラクロスは、他大学から「ひびられている」という。

更なるチーム強化のため、ただいま部員募集中！

金田辰弘先生を偲んで

生駒泰充（洋画分野教員）

自己を投影されたふくろうの絵で有名な人だった。もちろん、ふくろうの作品で秀作を数多く残されたが、私にはロバを描いた小品が忘れられない。荒野の中を一頭のロバがとぼとぼ歩いている。よく見るとロバの足が五本あるように見えた。それは、パーキンソン病という不治の病や、一人で支えきれない程の重さを支えるもう一本の足であったのかもしれない。塗っては削りの繰り返しの中で、自分捜しの旅をしておられたような気がする。病の為、満足に立てない様な状態で、キャンバスに倒れこむようにしながらカミソリで画面を削っておられたようだ。減っていく体重とは裏腹に、画面は増々重さを増し、風雪に耐えた石の様に画面は結晶し、美しく深い絵が残った。奥様の話によると、病室で二百号の絵を描こうとされたそうだ。それは見果てぬ夢となった。しかし、最後まで衰えぬ制作意欲を持ち続けるという画家としての本懐を遂げられたと思う。合掌。

自己評価報告書刊行される

教育の更なる活性化を探り、大学自身が現状を点検・評価。

1991年の大学設置基準改正によって、教育の現状を自ら点検・評価し、学内外に明らかにすることが、義務づけられた。京都精華大学においても、これを受けて自己評価制度を発足させることとなった。

しかし、アリバイ証明として体裁だけ調えてもしかたない、と精華らしい自己評価のあり方をめぐって長い討論が交わされた。そして96年春ついに最初の自己評価報告書「教育の活性化に新しい視点を求めて」が刊行された。

抽象的ではなく、具体的な教育活動をとりあげて、直接の担当者・関係者が吟味検討したレポートで報告書は構成されている。

美術学部は発足以来の特色である「学外実習」をとりあげ、これまでの経緯と将来の可能性を検討した。学外関係者の方々を交えた座談会も収める。人文学部のテーマは、新カリキュラムにおいて学部の導入となる「人文学部への視点」の試行と模索について。新しい建物に移ることを契機に新展開をはかる図書情報館も、業務を総点検した。

非常勤の先生方による座談会、本年度卒業生の満足度調査など、異なった角度からの意見は一層大学の姿をくっきりと浮かび上がらせている。

京都精華大学の未来へのステップボードとして、活用が期待される。

国際交流課ホームページ開設

大学のインターネット・ホームページ第1弾として国際交流課が、英語ページを開設した。

海外との密接な連絡が業務の重要な部分を占める国際交流課では、95年度から電子メールを導入した。ＦＡＸよりも通信費が格安なばかりでなく、様々な利便性がある。今では日常業務に欠くことのできない手段になっている。

一方、世はまさに空前のインターネットブーム。情報収集の手段としても急速に普及した。特定の相手との情報の送受信だけでも第一段階としては充分満足なものであったが、それだけではもったいない。ワールド・ワイド・ウェッブの活用を試みることとした。使い方次第では、不特定多数の、しかも関心を持っている人々に、迅速に情報伝達ができる。しかも全世界レベルで発信できることが、国際交流課としては大きな利点である。

まだ全学的なページがないので国際交流課独自でホームページを開設した（http://beehive.twics.com/~ksuinted）。

現在は英語のみ、大学の概要を簡単に紹介するものにすぎない。近く日本語版も立ち上げ、内容の充実を図りたい。

尚、現在のホームページの感想、ご意見は、電子メール（ksuinted@beehive.twics.com）までお願いします。

（国際交流課 鹿野健一）

最近の就職状況の変化について

先の見えない時代だからこそ、自分を確立することが要請されている。

雇用調整、終身雇用制の崩壊、年賃金から年俸制へ。そして新卒の一括採用から通年採用への移行などなど…。バブル崩壊以後の雇用情勢はそれまでとは大きく変貌している。

一方、学生の進路における選択肢も最近多様化の傾向が一層顕著になってきた。進学、留学、自営、各種インストラクター、俳優、声優、音楽・演劇をはじめとしたイベント企画など、まさに多種多様である。

文化と芸術、創造と表現を重んじる、人文・美術を対象とした本学の教育が多様な価値観を持った学生を生んでいるのだ。このような志向がでてくることに不思議はない。

10月1日、採用内定が開始した。すでに4年生の就職希望者の半数近くは内々定がきまっているが、これからの報告に期待している。

また、この時期は3年生の実質的な就職活動の開始時期でもある。

10月に行われた第2回ガイダンスは、次のような方針の下に持たれた。——自分を深く知る。社会を知る。会社を知る。何を学んだか。何ができるか。どう生きるか。——

就職をするにしろ、他の道を選ぶにしろ、この過程をはぶくことはできない。

3年生は「就職活動をするのは他ならぬ自分である」ことを強く意識して準備に入っていただきたい。

未内定の4年生にもまだまだチャンスはある。積極的に挑んでいただきたい。

とびらは開かれている。いつでも就職課にどうぞ。

（就職課 田所伴樹）

新人から一言

純粋な気持ちを新たに

奥村博美（美術学部陶芸分野教員）

学校を卒業して18年間一人で仕事をしてきて、いま人を教えるということに期待と不安を感じています。いろいろと考えてみると、結局自分がいかにその状況を取り込んで楽しく生きて行くかということなので、それなりに新しい生活になじんでいこうと思っています。

ものを作っていくときに技術が必要なときもあれば経験が大切なときもあるのでしょうが、学生時代の生き方と考え方はいまだに尾を引いています。教えるという立場に立って、新たに自分の気持ちを純粋にもって行けそうな気がしています。

E V E N T
案 内 板

アセンブリーアワー講演会

●9月19日（木）
『現代社会に宗教は必要か』
森岡正博氏（宗教学・哲学／国際日本文化研究センター研究員）

●10月3日（木）
『古典はむずかしい？』
田中貴子氏（国文学者／梅花女子大助教授）

●10月17日（木）
『自分を知るための哲学』
竹田青嗣氏（哲学・倫理／明治学院大教授）

●11月7日（木）
『自然からのメッセージ』
新宮晋氏（造形家）

●11月21日（木）
『考古学から見た日本文化』
森浩一氏（考古学者／同志社大教授）

●12月5日（木）
『聖書見ざる歌詠みは遺恨の事なり』
塚本邦雄氏（歌人／近畿大教授）

場所 流溪館会議室
時間 10:40〜12:10

京都の伝統工芸講座

●9月19日（木）
『京都の伝統産業における現状と展望』
川島春雄氏（川島織物名誉会長）

●9月26日（木）
『京指物とその周辺』
和田伊三郎氏（江南六代 京指物工芸家）

●10月3日（木）
『バーナーワークによるガラス工芸』
金子正宏氏（ガラス工芸家 ガラスの館夢工房主宰）

●10月17日（木）
『京菓子いろいろ』
山口富蔵氏（末富社長）

●10月24日（木）
『映画撮影における美術について』
石原昭氏（東映京都美術センター常務取締役）

●11月7日（木）
『輝けるきもの美』
田畑禎彦氏（日本染織作家協会理事長）

●11月14日（木）
『テキスタイルデザインの現状と展望』
清水忠氏（デザインプロデューサー）

●11月21日（木）
『佛像彫刻』
江里康慧氏（佛像彫刻家）

●11月28日（木）
『生活とデザイン』
恩地惇氏（ＧＫ京都取締役社長）

●12月5日（木）
『友禅の美〜技術と造形的試行〜』
森口邦彦氏（日本工芸会常任理事）

場所 春秋館101教室
時間 13:00〜14:30

KINO PRESS
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

同　窓　会　通　信

同窓会総会及び懇親会へのおさそい

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

今年も、まもなく木野祭の季節がやってまいります。毎年、木野祭の11月3日に『同窓会総会』と『懇親会』を開いておりますが、今年で第9回になります。先の東京支部設立に続き、今秋9月には西日本支部が発足しました。同窓会も着実に歴史を刻みつつあります。青春を謳歌した美しい木野の里で、秋の日の一日を旧友や先生方と語らって見ませんか。多数のご参加をお待ちしております。尚、懇親会は木野会が主催します。木野会会費が未納の方でも、どうぞご遠慮なくお越し下さい。

木野会　会　長／赤坂　博
専務理事／谷 真美子

第9回同窓会
1996年11月3日（日）
総　会
午後2時より　本館3階会議室
懇親会
午後3時より　悠々館

同窓会西日本支部発足記念パーティを開催

昨年より、支部発足のために準備をすすめておりましたが、去る9月23日（秋分の日）に念願の西日本支部が発足しました。

倉敷市のアイビースクエアにおいて午前10時から支部設立準備会が開催され、新役員の確認がおこなわれ、正式に発足となりました。支部長には津下勝年氏（74年度美術卒業）が就任する事になりました。御苦労の多い重責をお引き受けいただき、一同感謝しております。

午後1時からは支部創立記念パーティーが賑々しく催されました。木野会本部役員に加えて、京都からも多数の教職員が参加しました。渡辺直美さん（旧姓図子・68年度美術卒業）の司会のもと、津下新支部長および学校法人木野学園理事長笠原芳光先生（元京都精華大学学長）からの挨拶があり、赤坂博木野会会長の乾杯の音頭とともに始められました。

田中竹仙氏の津軽三味線演奏に、卒業生の参加するフラメンコ・チームのダンスなど、たくさんのアトラクションがあり、大いに会の雰囲気を盛り上げました。

卒業生が恩師らと語らい昔話に花が咲き、また卒業生同志も久しぶりの再会を喜びながら、旧交を暖めました。和やかなうちに散会しましたが、別れを惜しみ、2次会、3次会と夜遅くまで酒を酌み交わしたグループもあったようです。

今後とも、同窓会一同が津下支部長をもりたて西日本支部の発展のために力を尽くしたいと考えております。

同窓会木野会　専務理事／谷 真美子

父母懇談会のおしらせ

例年京都では父母との懇談会がもたれていましたが、京都以外でももって欲しいとの希望がだされていました。

今年から福岡、広島でも懇談会を開催いたしました。福岡は『東京第一ホテル福岡』で9月21日に、広島は『アークホテル広島』で22日に開催されました。

ご父母の出席は、福岡がいささか少なかったが広島は六十人と大変盛況でした。懇談会は、ビデオによる大学紹介や出席の先生から学部の説明などがあり、大学への理解を深めてもらいました。引き続いての懇談会では、大学関係者とご父母との間で会話がはずみ和やかな雰囲気で親交を深めることができました。

尚、京都での懇談会は11月3日に大学で開催の予定です。是非多数のご父母のご参加を希望いたします。

（企画室　花谷薫）

1997年度入試について

来年度入試については大きな変更点はありません。今年度入試において、枠組み・科目などを変更したため、あと数年はこのままの入試制度を継続する予定です。人文学部については、89年の学部新設以来、入試は年々難化しています。予備校や出版社から発表されている偏差値をみると、今年は51～55であり、18歳人口の減少期にもかかわらず、入学のレベルは高くなっています。ただ、今年度入試より偏差値と相関関係があまりない「論文入試」を大幅に取り入れたため、偏差値だけでいうと、今後はこれ以上上昇することは考えにくいようです。論文入試を取り入れたのは、『受験勉強一辺倒の頭でっかちよりも自分で考えられる主体的な人を』という狙いです。

美術学部については、関西の美術系私立大学の位置付けがほぼ固定していることもあって、その評価は、あまり変動しません。大阪芸大、京都造形芸大とともに難度は維持されています。美術系大学の場合、教員や施設の充実度と同様に、卒業生の活躍ぶりの社会的な評価が大学の評価につながることも多いので、精華大関係者の今後の活躍に期待します。

（入試広報課 福岡正藏）

京都精華大学1997年度入試日程

人　文　学　部

試験種別	出願期間	試験日	試験科目	試験会場
公募制推薦	11月1日（金）～11月13日（水）	96年11月22日（金）	論文	京都
一般1期 3科目方式	1月13日（月）～1月29日（水）	97年2月11日（火）	英語 国語 選択科目	京都 東京 金沢 名古屋 大阪 広島 福岡 高松
一般1期 論文方式	1月13日（月）～1月29日（水）	97年2月12日（水）	論文	京都
一般2期	2月17日（月）～2月26日（水）	97年3月7日（金）	英語 あるいは 論文	京都

美　術　学　部

試験種別	出願期間	試験日	試験科目	試験会場
公募制推薦	11月4日（月）～11月15日（金）	96年11月25日（月）	専攻分野別適性検査	京都
一般1期	1月10日（金）～1月24日（金）	97年2月6日（木）～97年2月8日（土）	デッサン 専攻分野別実技	京都
一般2期	2月14日（金）～2月24日（月）	97年3月2日（日） 97年3月3日（月）	英語・国語（建築のみ数学可） 専攻分野別実技	京都

※他に自由選抜（人文のみ）、留学生、帰国生徒、社会人の特別枠入試があります。

願書請求は入試広報課まで　フリーダイヤル 0120-075017

木野通信第26号
1996年11月1日発行
京都精華大学
京都精華大学　庶務課 〒606 京都市左京区岩倉木野町137　TEL 075-702-5200